The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コミュニティにおける日本人日本語教師の学びとその学びをもたらした要因 : タイの大学で教える教師のケース・スタディ
Author(s)	大河内, 瞳
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59503
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　大　河　内　瞳　）	
論文題名	コミュニティにおける日本人日本語教師の学びとその学びをもたらした要因 ―タイの大学で教える教師のケース・スタディ―

論文内容の要旨

本研究は、タイの大学で教える日本人日本語教師が、所属する大学内に創り出されているコミュニティで何を学んでいるのか、またその学びはどのような要因によってもたらされているのかを明らかにすることを目的とする。

本論文は12の章からなる。この12の章は大きく四つの部分に分けられる。一つ目は、本節を含む「第1章　研究の出発点」で、研究を始めるに至った私自身の経験をまとめた。

二つ目は、第2章から第6章までの理論部分である。「第2章　同僚性に関する研究」では、同僚性に関する研究の流れを概観した。同僚性の概念は、その概念が注目され始めた当初、教師の孤立を克服する解決策として肯定的な側面が強調されたが、その後、同僚性が持つ否定的な側面と教師の個人主義が持つ肯定的な側面の両方に目が向けられるようになった。そして、職場条件の中で独立した要素として重視された同僚性は、その他の条件との複雑な絡み合いの中で検討していく必要性が論じられるようになったのである（Kelchtermans, 前掲）。その結果、新たに関心が向けられるようになったのが、コミュニティ（community）の概念である。

「第3章　コミュニティ研究」では、同僚性に関する研究に続いて関心を集めるようになったコミュニティ研究を、コミュニティ研究に影響を与えた研究を踏まえた上で、用語と定義、構成要素、意義という三つの側面から概観した。コミュニティの概念は普遍的な定義がないが、コミュニティを構成する要素としていくつかの要素が挙げられた。本研究では、Hord（1997）等の先行研究をもとに、共有された価値観とビジョン、リーダーシップの共有、支援的条件、個人の実践の共有、集団的な学びとその応用という五つの構成要素を確認した。そして、このような要素を持つコミュニティには、学習者の学びの成果を測る道具としての役割ではなく、コミュニティに参加する人々の意味の探求とコミュニティの意味の探求という意義があることを指摘した。

「第4章　教師の学びに関する研究」では、現在、コミュニティ研究の中心に据えられているのが教師の学びであることから、教師の学びに強く影響を与えた学習に関する研究、教えることに関する研究を概観し、それを踏まえて教師の学びに言及した。そして、現在、教師の学びはコミュニティの中で生起する能力の構築として捉えられるというMitchell and Sackney（2011）の説に言及した。また、知識社会への移行に伴う社会からの要請が、教師の学びが近年注目される一因となっていることにも触れた。だが、教師の学びは、研究の発展、及び社会的要請からだけではなく、教師が自らの人生を生き、教師を生きるという営み自体に内包されたものでもあった。

これらの先行研究を踏まえ、「第5章　本研究の立場」で、本研究におけるコミュニティと学びの概念を定義し、リサーチクエスチョンを提示する。本研究のリサーチクエスチョンは、1）協力者である教師は所属する大学内に創り出されたコミュニティで何を学んでいるのか、2）その学びはどのような要因によってもたらされているのか、の二つである。第5章に続く「第6章　日本語教育における教師研究」では、日本語教育分野の教師研究を概観し、日本語教師研究における本研究の位置づけと意義を述べた。

三つ目は、実際に行った調査ついて詳述した。これは、第7章から第11章までの5章からなる。まず、「第7章　研究方法」で、本研究で採用したケース・スタディについて述べた。続いて、「第8章　研究概要」で、研究の協力者選び、データ収集方法、分析方法、さらにケースで用いる記号について整理した。「第9章　吉田さんのケース」と「第10章上山さんのケース」では、本研究に協力してくださった吉田さんと上山さんの学びとその学びをもたらした要因を詳述した。吉田さんのケースでは、吉田さんが五つの場で学びを経験していることを、上山さんのケースでは、上山さんが六つの場で学びを経験していることを明らかにした。

「第11章　吉田さんと上山さんのケースから見えてきたこと」は、本研究の考察部分で吉田さんと上山さんのケースから明らかになった教師の学びの様相と、教師の学びをもたらす要因をまとめた。各ケースで明らかになった2人の学びとその学びをもたらした要因を踏まえて、2人の学びを個人に関わる能力構築、コミュニティの実践に関わる能力構築、組織の実践に関わる能力構築という三層から捉えることで、2人の共通点と相違点を探求した。その結果、個人

に関わる能力構築としての学びは、根底にある教師の知識についての学びと実践についての形式的な学びの二側面から捉えることができた。次に、コミュニティの実践に関わる能力構築としての学びも、二側面から捉えることができた。一つは、メンバー間の関係性についての学びであり、もう一つは、コミュニティの維持と発展を支える実践についての学びであった。最後に、コミュニティが埋め込まれた組織を機能させるための学びである、組織の実践に関わる能力構築としての学びがあった。

さらに第11章では、2人の共通点と相違点の探求は、これまでのコミュニティ研究に欠けた二つの視点があることも示していた。2人の学びをもたらした要因として、メンバー間の関係性、学科のシステム、空間設計、仕事の分担とそれに関連するリーダーシップの存在、授業実践の共有があった。また、吉田さんにのみ見られた要因には、教育目標確立のプロセスと確立された目標、取り組みの目的の共有、学科からの影響があった。これらの要因はこれまでのコミュニティ研究でも指摘されてきた要因と関係するが、それ以外にも、吉田さんと上山さんの過去の経験と未来への思い、及びコミュニティ外での経験が2人に学びをもたらしていることが明らかになった。この二つの視点はこれまでの研究では関心を払われてこなかった点である。その一因は、本研究の出発点となっている教師の学びを教師の視点から捉える必要性を、コミュニティ研究が認識していなかったことにあった。コミュニティを一つのまとまりで捉えた場合、個々の教師の過去や未来、さらに対象となっているコミュニティ外での経験は切り捨てられることになる。だが、この二つの視点を抜きにして、教師の学びの経験を理解することはできないし、教師の学びを理解することなしに、コミュニティの学びの理解は成しえないのである。以上、本研究では、教師の学びの様相とその学びをもたらした要因を明らかにすると同時に、これまでのコミュニティ研究に欠けた視点を指摘した。

四つ目は、「第12章　研究の現在地」である。最終章となるこの章では、本論文のまとめと研究の課題を述べた。また、一つの研究を終えた私自身のまとめを記した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　大河内瞳　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	大阪大学　教授	青木直子
	副 査	大阪大学　教授	石井正彦
	副 査	大阪大学　准教授	三宅知宏

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：コミュニティにおける日本人日本語教師の学びとその学びをもたらした要因
―タイの大学で教える教師のケース・スタディ―

学位申請者　大河内瞳

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　青木直子

副査　大阪大学教授　　石井正彦

副査　大阪大学准教授　三宅知宏

【論文内容の要旨】

本研究は、タイの大学で教える日本人日本語教師が、所属する大学内に創り出されているコミュニティで何を学んでいるのか、またその学びを可能にしている条件は何かを明らかにしようとしている。本論文は 12 章からなっており、図表を含めて A 4 判 195 ページ、400 字詰め原稿用紙で 700 枚程度に相当する。

12 の章は大きく四つの部分に分けられる。第一の部分は、第 1 章で、研究を始めるに至った申請者自身の経験をまとめている。

第二の部分は、第 2 章から第 6 章までの理論部分である。第 2 章では、教師研究における同僚性に関する研究の流れを概観し、同僚性という概念の限界について論じている。第 3 章では、同僚性の限界を越えるものとしてのコミュニティ研究を、それに影響を与えた他領域の研究を踏まえた上で、用語と定義、構成要素、意義という三つの側面から概観している。第 4 章では、教師の学びに関する研究に強く影響を与えた学習に関する研究、教えることに関する研究を概観し、それらを踏まえて教師の学びに言及している。第 5 章では、本研究におけるコミュニティと学びの概念を定義し、リサーチクエスチョンを提示している。本研究のリサーチクエスチョンは、1）協力者である教師は所属する大学内に創り出されたコミュニティで何を学んでいるのか、2）その学びはどのような要因によってもたらされているのか、の二つである。第 6 章では、日本語教育における教師研究を概観し、日本語教師研究における本研究の位置づけと意義を述べている。

第三の部分は、フィールドワークによって収集したデータに基づくケース・スタディであり、第 7 章から第 11 章までの 5 章からなる。まず、第 7 章では、本研究で採用したケース・スタディについて述べている。続いて、第 8 章で、研究の協力者選び、データ収集方法、分析方法、さらにケースで用いる記号について整理している。第 9 章と第 10 章は、本研究の協力者、吉田さんと上山さんの学びとその学びを可能にした条件について考察している。第 11 章では、二つのケースの比較を試み、吉田さんと上山さんのケースから明らかになった教師の学びの様相と、それを可能にした条件についてまとめている。その上で、従来のコミュニティ研究に欠けていた視点があることを指摘している。

第四の部分は、第 12 章であり、本論文のまとめと今後の課題を述べ、一つの研究を終えた申請者自身について

の振り返りを記している。

【論文審査の結果の要旨】

本研究がフィールドとするタイは、日本語教師を志す日本人が、最初の職を得る機会のあるところである。修士号や博士号が大学で教えるための条件とはされておらず、大学に外国人の教師が現地で生活していくために必要な給与を支払える経済力があるからである。そのような国をフィールドとして、職場における日本語教師の学びを記述しようとしたことには意義がある。教師研究における同僚性から professional learning community への流れを詳細にレビューしたこと、一つのケースに１ケ月という期間フィールドワークを行い、その後も複数回にわたるインタビューを行って大量のデータを収集したこと、それらのデータをもとに一人一人の教師の学びの諸相を詳細に記述したことは評価できる。特に、日本語教育における教師の学びについての先行研究が、授業実践の能力に範囲を限定しがちだったのに対し、職場の対人関係や組織の管理・運営に関する学びも視野に入れた点は、本研究のユニークなところである。しかしながら、本論文には不足な点も多い。まず、先行研究のレビューの範囲が狭いのではないかという疑問が残る。本論文の結論は、従来の professional learning community 研究が見落としていた、教師の複数のコミュニティへの所属、過去の経験と将来への希望が、教師の学びに影響を与えることを明らかにしたと主張している。確かに professional learning community の研究に関しては、その通りであるが、このことはすでにナラティブ・インクワイアリー、ライフストーリー研究、ライフヒストリー研究などが明らかにしていることである。新たな発見とは言い難い。次に、マルチプル・ケース・スタディは、複数のケースを比較することで、なんらかの知見を導きださなくてはいけないが、ここで取り上げられた二つのケースからそれができているかというと、個々のケースの記述にとどまってしまっている印象を受ける。ケースが二つしかないという限界はあるものの、もう少し多角的に二つのケースを比較したら、より重要な知見が得られたのではないかと惜しまれる。また、個人をケースとした研究では難しいということを承知の上で言うなら、一人の人間の中の矛盾、ネガティブな側面、職場のコミュニティのネガティブな側面がケースの記述にほとんど含まれておらず、支援的なコミュニティ、理想に向かって努力する教師というナラティブを構築するためのスムージングが起きていた可能性が疑われる。さらに、本論文のキーとなる用語のいくつか（例えば、組織、場、要因など）に関して、概念的な吟味が不十分であり、厳密な議論の組み立てを妨げている部分もある。このような欠点はあるものの、本論文は博士論文としての要件は満たしていると考えられる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。